
ETERNITY

フィリップ谷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ETERNITY

【著者名】

N6301Y

【作者名】
フィリップ・谷

【あらすじ】

四大企業がすべてを統治する近未来世界。ナノマシン群体と第七世代人工知能によって構成される特殊兵器「ディフェンダー」を駆使して戦う傭兵や企業私兵を養成する聖ヨハネ騎士団学園に、運動神経ゼロ・わがままボディの少年が入学してくることになった。少年は学園の調査部が長年に渡つて探し続けてきた、?片方の羽根?だというが……。

「のたびは、
本ページを開いてください、
まことに、
ありがとうございます。」

実は、どうしてもお読み頂くまえにお断りしなければならないこと
があって、前書きを設けさせていただきました。

結論から申し上げますと、この作品を「」に書き散らす目的は、
筆者の自己満足以外のなにものでもない、ということあります。

物語には始まりがあれば終わりがあるので、完結しない話は物語とは言いません。

したがって、この「」において連載を始めるからには、きつち
りと終わらせるのが、作者の、読者に対しても負うべき責任であり、
また礼儀だらうと思います。

しかしながら、本作品の筆者は「」と読者の皆様に対しても
お約束いたしかねます。

要するに、嫌になつたら途中で放り出す、ところ「」とあります。
どうもか、出来が気に入らなければ丸ごと削除する「」とあります。

またエンターテイメント作品には基本のスタイルと「」ものがあり、公募に出す際にはこの様式をきつちりと遵守し、その枠内で出来る限り面白いものを書くこととで腕前を見てもりうと「」、暗黙の

了解のよつなものがあります。

この様式のあり方には案外多様性がなく、単行本程度のルールブックに集約できると言えると思います。これは小説を数年書いていれば誰でも知ることができます。

このルール群は詰まるところ、整つていてストレスなく読めるものを書くための、ひとつの一様式に過ぎないのですが、どうもこの規格に適合しない作品はダメであるといつ認定をされがちです。

そして実際ダメなことが多いです（笑）

結局、守つて書くのが無難なのはあります。が、あいにく筆者は、この規格を守つて書くのが嫌になりました。

それは守るだけの力量がないからであり、守つて書いていても楽しくなくなってきたからでもあります。

ここでは、もうひとつ、お断りをしなければなりません。

本作品は、小説の一般的なかたちに適合しないといつ意味で、相当な駄作になると思います。

もつと端的に言つと、筆者は自分のツボに正直に、好き勝手書かせてもらつてしまつてある、ということです。

もつひとつ。

筆者はこの作品を、小説を書き始めたころに戻つたつもりで、（大まかなラインは念頭に置きつつも、基本は）行き当たりばつたりに書いていこうと考へています。

広げた風呂敷をきつちり置む（これはつまり物語に起承転結をつけることを意味する）を、最大の目的としません。

広げたら広げっぱなし、といつとも多発するかと思います。

ここまでお読みになつた方には言つまでもないのですが、本作品は、書き手は楽しいけれど、読まされるほうはたまたものではない、といつ代物になる可能性大です。いや、必ずそなります。

そんなのはチラシの裏にでも書いておけといつお叱りは『もつともですが、せつかくこういう場があるので、そんなチラシの裏でも覗いてやるうじやないかという奇特な方がいらっしゃらないとも限りませんので、

あえて！

筆者の血口満足を書き散らしてみたいと思います。

このよつな次第でありますから、読者各位におかれましては、本作品を華麗にスルーしてくださるか、そもそもなければ、（初っ端からこんなことをくのたまうゝ筆者がもじご不快でなければ）ひとつお付き合いくださいますよつ、宜しくお願ひ申し上げます。

尚、本作品に登場する人名・地名・団体名等は、実在のそれ等とは一切関係がありません。

2011年11月吉日 筆者

白、白、白……

強烈な光のなかを、淡い影のかかつた白衣が行き来している。衣擦れの音や、サンダルがリノリウムをこする特徴的な音が、単調に続いていた。

目をあげれば、ラウンジの壁にはめ込まれた大型のテレビに、背広の男が映っている。かれはニュースを読み上げていた。そこにはさつきまで、片方の羽根しかもたない哀れな天使が写っていた。天使は、失つたもうひとつの方羽根を捜して旅をしていた。そういう筋書きの短い映画だった。

天使は鎧付いた戦車が放置され、瓦礫の散らばる戦場跡を、彷徨う。悲しみに暮れる人々のあいだを、呆然として歩くのである。天使はあどけない顔をしていた。怯えながら廃墟を歩くそのすがたに神々しいところはなく、表情ははつきりと悲しみに曇っていた。ミカはこの天使に言いようのない親しみと懐かしさを抱いた。どこかで会つたことがあるような、そして、彼の探しているもう一方の羽根が、まさに自分の背中にあるような気がしていった。天使がミカを探しているように、ミカも天使を探している。そんな奇妙な感覚がずっと拭えなかつた。

（私は……ここにいる……）

そう呼びかけようとしても、ミカは声をあげることができなかつた。

ナースステーションの硝子に淡くうつる自分の姿は酷かつた。細い体の半分以上を包帯で包まれ、車椅子にぐつたりとしていた。呼吸をするたび、心臓が鼓動を刻むたびに、脇に据え付けられた生命維持装置が冷たい電子音を鳴らす。

（私は……ここにいる……）

ミカは手を伸ばす。その腕には幾つものチューブが差し込まれて

いた。けれどもかの女は、失望してはいなかつた。むしろ、ざらざらだつたふたつの羽根が出会い合つときを予感して、心にほんのりと温かいものを感じていた。

（彼は……さうとこじこへる……）

白いひかりが揺れています。

鎮痛剤の作用で、ばらばらにされた体に痛みはなかつた。かわりに、そつとするような冷たい倦怠感があつた。そこに落ちたら一度と目覚めることのないような、冷たい眠気が襲つてくる。

（怖い……）

ミカは、声にならない声をあげた。そして、ゆっくりと眼を瞑つた。

最上雅春は舌打ちをして、彼岸過迄を図書室のテーブルに伏せた。辺りは寂然としている。

遠くから、エーテルワイスの伴奏と斎唱がぼんやりと聞こえてきた。

雅春は溜息をついて、席を立ち、窓辺に立った。そうして、真昼の太陽に輝く大都市のビル群をしばらくあてもなく眺めた。

近頃、ゆっくりと読書ができない。

それは時間的・空間的な制約からではなかった。いつでも学科の授業など抜け出せるし、事実、いまこうしている。今頃おなじクラスの連中は、黒板に書き出された三角関数と格闘しているはずであった。

ゆっくりと読書ができないのは、かれを取り巻く様々な問題が、すこし複雑になってきたためだった。

頭をすつきりさせるつもりでここへやってきて、小説をひらくのに、ふと気づけば諸々の問題のことを考え込んでしまっている。

いまもそうだった。

あの紺野ミカが実戦訓練中に瀕死の重傷を負い、いまも生死の境を彷徨つていることは、雅春にとつて未だに認めることのできない失敗だった。

ふたたび舌打ちをし、窓枠に拳を軽く叩きつけたとき、図書室のドアが無遠慮に開かれた。

雅春が振り返ると、そこにはパンツスースツ姿の美しい女が立っていた。

女は、おまえを探すのに手間取ったんだぞというように軽く顎先をあげ、テーブルにつく。そして、座れとばかりに、向かいの椅子を指さした。

「調査部が見つけ出したようだ、？もう一方の羽根？」を

女は、雅春が席につくなり、長い黒髪をかきあげながら、そう言った。

雅春は薄い唇の端に皮肉っぽい笑みを浮かべ、

「羽根だって？ その表現、陳腐すぎて笑えるな」

「老人どもがそう呼んでいるのを借用しただけだ」と、女は言い訳がましく言う。そうして無人の図書室を見渡して、「……相変わらず授業をサボっているのか」

「？ あいつは食み出しだのだ？ つていう評判がどうしても必要なんだよ。好きでサボってる訳じゃない」

「どうだか。……」こつちは、おまえが学業不振だと叱られるんだ。ちゃんとやつてくれ

「だから企業お抱えのガーディアンになんかなるもんじゃないって言つただろう？」

「おまえも似たようなものじゃないか。霧島の出資でこの学園にいるのだからな」

「一緒にしないでくれよ。あんたは社畜。俺はこんなところいつでも辞められる」

「ほう、言つじゃないか。いまさら霧島の『ティフロンダー』を捨てようものなら、それを聞きつけた連中が大挙しておまえを殺しに来るぞ。お互い敵が多いのだから、気をつけないとな」

女はニヤリとする。雅春は鼻を鳴らして、

「……で、？ もう一方の羽根？ はどのチームに配属させられるんだ？」

「言つまでもない」

「北朝の息がかかつたところに、か」

雅春が呟くと、女は首をかしげた。「北朝？」

「そうか、あんた知らないのか。生徒の間じゃあ、新生徒会をそう呼んでるんだ」

「ほう。で、今までの生徒会は？」

「北朝とくれば、分かるだろ。南朝だ。どちらにも一応の力と正当

性があるからな、生徒たちはいざれが本当の、偽の、といつ風には言えないんだ」

女は、なるほどという表情を浮かべ、「それにも、理事会の決定をもって白黒つける訳にはいかないのか」

「無理だ。あんたも知っているだろ。南朝の背後にはパーミッシュ（Pacific Rim Military Industrial Complex）、北朝の背後には九竜公社がついている。アフリカや中南米の代理戦争と構図はほとんどおなじなんだよ。でも、霧島はどうするんだ。勝ち馬九龍に乗るのか、落ち日のパーミッシュに肩入れして恩を売るのか」

「そのいざれでもない」と、女は言った。「少なくとも、今のところは、な。で、おまえの希望はどっちなんだ？ 上に伝えておくぞ」「どうでもいいが、方針をこころこころ変えるのだけはやめてくれと言つておいてくれ。こつちは状況に合わせてどうとでも動く。こだわりはないよ。……で、仮に、だけ……」

雅春は顎に手をあてる。女は眼を細めた。

「仮に？」

「俺が？ もう一方の羽根？ を手元に置いておきたいと言つたら、上は嫌がると思う？」

「だろうな」と女は言った。「霧島はいざれの陣営にも肩入れしないが、さりとて表立つて敵対することも望んでいない」

「しかし、羽根のテスト・ユーザーとしての利用価値は決して少くない筈だけど？」

女は苦笑いを浮かべた。「……分かった。開発部の役員に働きかけてみよ。で、羽根を手元に置いてどうするつもりだ」

「そこまでは考えていない。けれど、黙つて北朝に預けるのも面白くないからな……」

雅春はすこし俯いて言った。介入を躊躇つたために、紺野ミカは重傷を負つたのである。

「おまえは案外、そういうところがあるのだよな」女はどことなく楽しそうに言った。「まあ、おまえが指導担当になるのなら、文句は出ないだろう。それに、それが本人のためかもしれない」女は、近いうちに連絡すると言い、淡い香水の匂いを残して、席を立つていった。

「うおー、ふざけんなつづつ話です！」

逢坂聖人が一〇四年三月一十八日付で自身のブログに書き綴つた文章は、右の言葉から始まる。

おやじがね、昨夜、デロンデロンに酔つ払つて帰つてきたんです。おやじは半導体メーカーの法人営業部に勤める、じく普通のリーマンです。

接待とかあるから、デロンデロンに酔つて帰つてくるのは珍しくないんですよ。

でもね、その日に限つて、なんかね、様子がおかしい。

次の人事異動で、取締役営業本部長に抜擢されることが内定したとかなんとか、喚いてるんです。おやじ主任だから、そりやもう、嘘みたいな大出世ですよ。で、お母さんは大喜びで、赤飯炊くとか言い出してるし、役員になると豪華な社宅があてがわれるらしくて、妹たちはパンフレットをひろげて部屋割りの話でもりあがつてるんです。

俺、風呂からあがつてそんなリビングの風景を見て、へへーよかつたねーと、軽く言つて、部屋に引き取らうとしたら、おやじがね、待て、そこに座れつて言つんです。

「お前、ゲームクリエイターになるのが夢なんだつたな」
酔つた眼を俺にむけて、親父が言つ。

「まあね」

そんなのもう何度も話しあつたじょんとばかりに、俺は言いました。とりあえず普通科の高校を出たら専門学校に行き、ゲーム会社に就職する、大学にはいかない そういう話で落ち着いているんです。

次の瞬間、気まずそうに脇を向いたおやじの口からとんでもない

言葉が出てきました。

「諦める」

「我が耳を疑いました。

「だつて、そうでしょう？ ハア？ ですよ。子供にむかって夢を諦めろなんて親、存在していいんですか？ ねえ、そんな親アリですか？」

「おまえは傭兵になるんだ いや、嫌ならなくともいいんだ、警備員になつても構わない。が、とにかく傭兵？ 種の養成課程だけは修了してもらわなきゃならん」

「ヨーヘイイッシュ？」

なんのことが、すぐにはわからなかつた。それで鸚鵡返しをすると、おやじはあれだと言い、テレビにむかつてあごをしゃくつた。そこにはアフリカの小国のクーデターをたつたひとりで阻止するという嘘のよつよつな武勇伝を誇る少女の、砂にまみれた、けれど美しい横顔が映つていた。

テロップを読んでみる。

熱烈大陸。日出する国からやつてきたジャンヌダルクの、戦いの流儀とは。提供、人類の明日を創造する、サヴォイア・インベストメント。なにかのドキュメント番組らしい。

「知らねーつづうーの……」

「嘘をつけ」とおやじは言つた。「こまをときめく無双少女・野宮美穂を、おまえが知らないはずはない。最先端のディフェンダーとともに、反政府軍の大隊をひとりで壊滅させてしまう、しかもこれだけの美貌だ。お父さん知つてるぞ、このガーディアンの少女、その手のマニアの間じや、大人気だそうじやないか」

それは俺もよく知つてゐるが、知らねーつていうのは、話の進展についていけないことからくる一種の拒絶感から出てきた嘆き、魂の嘆きだ。なのに、いちいち説明されても困るんだよ。しかしあやじはそんな俺の気持ちを知る由もなく、続ける。

「お父さん、ちょうどおまえくらいの歳にね、こんな可愛らしい無

双少女が登場するゲームでよく遊んだもんだよ。おまえはツイてる。ゲームを創る側じゃなくて、ゲーム的世界の主人公になれるんだからー。」「

なんだその強引な理屈は。確かに混沌とした国際情勢のなか、ディフェンダーを頼りに戦いの日々を送るのは、ゲーム的かもしれない。しかし、それはゲームじゃなく、リアルだ。要するに戦争に駆出されるってことじゃないか……。

おやじは悪魔的な微笑を浮かべて、

「あの少女もかつて在学していた学園に、おまえは進学するんだよ。どうだ、ワクワクしないか?」

「しない! とにかく、いやだ! 俺はゲームクリエイターになりたいのであって、ゲーム的世界で生死の境をさまよい歩くつもりはないの! そんな学園には行かないから!」

すると親父は溜息をつき、

「けどね、そういう訳にはいかないんだよ。お父さん、先方さんと約束しちゃったから」「

「つまり、俺が、その学園に行くってことを?」

「おやじはこくつと頷いて、

「……そのなんだ、おまえくらいの歳になれば、なあ、わかるだろう? 勤め人として、どうしても断れないことって、やっぱ、あるんだよね……空氣的に、さ」

俺はそこでやっと、ピンときたんです。

「おやじ……俺を売ったのか? 実の息子を、出世のために、売り飛ばしたのか?」

おやじは遠い目をして、こう答えました。

「だってさ、親会社の重役さんがつれてきた、その学園のひとがね、どうしてもおまえのことが必要だつていうんだよ。……しかたないだろ?」

その返事に、むらむらと怒りが湧き起しつつきました。

「ちくしょー! 親父なんか大嫌いだ!」

俺は思わず叫び声をあげると、部屋にもどって鍵をしめ、枕に顔をうつめてわんわん泣きました。わんわん泣きました。大事なことなので一度言いました。

どれくらい、泣いていただろう。

そつだ家出をしよう。

心に固く誓つて、枕から顔をあげ、俺は準備のために部屋を出た。そしたら、ベランダへのサッシが開け放しになつていて、カーテンの裾がゆらゆら揺れてました。

ちょっと覗いてみたら、おやじがむせび泣きながら、タバコを吸っていました。

ごめん、聖人。ほんとうに、ごめん。

俺はしばらくおやじの様子を見守つてから、一抹の諦めを胸に、そつと部屋にもどりました。

けれども、いまでも少し苦しいです。だって俺、結構本気で、ゲームクリエイターになりたかったから。

暗く濁つた空からぱらつく小雨が、窓に水滴を散らす。

最上雅春は自室のソファにもたれながら、刻々と模様を変える窓のじすくをぼんやりと眺めていた。

野宮美穂の携帯の留守電に、ヒマが出来たらすぐに連絡をよこせというメッセージを残してから、一時間が経っている。

苛立ちはパークに達しつつあった。

雅春は手をのばして硬式の記念ボールを取ると、打ちっ放しの壁に思い切り投げつけた。フローリングに大きくバウンドしたボールは、パズルの摩天楼にあたり、ピースが湿気た音をたてて散らばった。

雅春はしばらぐ、倒れたパズルを見つめていたが、やがて片付けるつもりで立ち上がったとき、携帯電話が鳴った。

スタンドから取り上げて、耳にあてる。

「遅えよ」

『「ごめん、大統領官邸の晩餐会に呼ばれちゃってさ。ねーねー聞いて。あたし、きんぴかの勲章貰っちゃった! それから、記者会見で質問攻めにあつて、いまやつと体があいたの! 初キスの年齢を聞く記者とかいるんだよ? 信じらんない?』』

美穂は嬉々として喋りつづける。雅春は溜息をつき、パズルの枠を起こした。

『「そうだ! あのさ、テレビ見ててくれた? あたし可愛く映つてた?』』

「アホか……」雅春は冷然と咳き、「アイドル気取つてんじゃねーよ。おまえは傭兵なんだ。仕事を済ませて報酬を受け取つたら、さつさと帰つてこい。自分の置かれてる立場がまだわかんねーのか?」少しの沈黙があった。

『「……ひどい。あたしだつて、頑張つてるんだよ。少しくらい褒め

てくれたつていいじゃん』

「いいか、よく聞け。当分のあいだは姿を晦ませるんだ。知らない奴からの面会の申し入れは一切断れ。取材もだ。おまえは目立ち過ぎなんだよ。なあ、おまえを消したがってる奴は大勢いる……わかるだろ？ 頼むからこれ以上……』

美穂はとつぜん遮つて、

『雅春のバーク！ もう一度とあんたに電話なんてしないから…』

「お、おい、美穂！」

呼びかけたときには通話は切れていた。

突然、雨脚が強まる。その騒音に、近頃癖のよくなってしまった雅春の舌打ちが焼き消された。

イケメンなのに彼女ができるないヤツには、それなりの理由がある。幼馴染の雅春を見ていると、美穂はつづくそう思つ。

美穂はもういちど、携帯電話にむかって（バカ……）と呟く。（あたしだって、いつまでも子供じゃないんだから……）

姿見のまえでパーティー・ドレスを脱ぎ、下着だけになつてホテルのベッドに横たわる。そうして五秒も呆然としていると、華やかな大統領官邸のパーティーの雰囲気は消えて、戦場の怒号や砲声、土煙や硝煙の匂いが脳裏に蘇つた。

焼け爛れた戦車から火達磨になつて降りてきた、若い黒人の兵士が、美穂に向けた、恐怖に歪みきつた眼は、きっと一生忘れることができないだろ？。

（あたし、なにやつてんだる……）

そんなことを、ふと思つ。

銀行の口座には、スラムで生活していた頃には想像もつかなかつたほどの大金がうなつていて、あらゆるメディアが、自分の一挙手一投足にカメラを向けている。大企業や政府の要人が、驚くほど腰を低くして自分に接してくれる。

どうせ生きるなら、太く短くがいいと、美穂は思つている。

お洒落をして、高い服を着て、みんなの注目を浴びて、なにが悪い。それで死ぬことになるなら、運命なのだから、仕方ない。

もつと素直に言つなら　やつてられない。

けれど、雅春は昔から違う。甘いところがない。威張つてゐるけど、いつも冷静で、みんなが生き延びることを第一に考える　そういう少年だった。

いつからか、美穂はそんな雅春に特別な感情を抱くようになった。けれども雅春が自分に抱く感情は、すこし違つていた。それがときにくすぐつたく、またときにはじれつた。いまのように、鬱陶し

いこともある。

（アイドル気取つてんじゃねーよ、か……）

「つっさい」と美穂はうなつて、枕を天井に投げつけた。自分だって素人ではない。目立てば狙われることくらい、分かっている。けれど、自分がどうしてそうせざるを得ないのか、雅春は考えようとしてくれない。

（バカ……）

美穂はもういちど呟くと、身を起こして旅行かばんを開き、シャネルのワンピースを取り出した。貧民街で生まれた女の子には、体を売つても一生着ることのできない、高価な服だ。それを美穂は着ることができる。

（あたしは打ち上げ花火みたいな一生でいいんだもん……）

美穂はワンピースを身につけると、香水を振つて、ホテルの部屋を出た。

「あれから、着信拒否されてる……。くそ、あのバカ女……」
 雅春は碁笥に指をさしこみ、石を碁盤に打ち下ろした。
 「ほひ、そこ切つてくるか。だいぶイラついてんな、おまえ?」
 司馬孝典はじばりく盤を眺めたあと、喧嘩には乗らないとばかりに離れたところへ白を置いた。

囲碁部の部室にて、春の午後のつららかな光が差し込む。

雅春は茶を啜つて、

「しうがねえから、チケットと休暇を取つたよ。つー訳で、明後日からむひへ行つてるから、悪いけどそのあいだ、よろしく頼むよ

「聞いてるだ。？もう一方の羽根? がお前んとこに入つてくるんだつてな。……わかつた

「助かる」

「野宮よひじく」

「あー……あともう一つ、頼みがあるんだ」

雅春は思い出したよひに言いながら、碁石を盤におひす。

「なんだ」

「占つてくんねえか。どうせ、嫌な予感がするんだよ

司馬は黙つて碁を打つ。

「ケチんなつて。おまえの占い、けつこいつ当たるからな。いいだろ?」

「占いは信じないンじゃなかつたのか」

「まあ、な」雅春は頭をかく。「けれど、とりあえず無事つて出でくれたら、今夜はゆつくり眠れそうな気がするんだ」

「……十円玉、三枚あるか」

雅春は財布から硬貨を取り出して、司馬に手渡した。司馬は眼鏡をはずして盤の脇に置くと、隣の机にタオル地のハンカチを広げ、

そのうえにパラパラと硬貨を落とした。

おなじ動作を何度もくりかえしたあと、

「……今日は何日だつたつけな」

「四月六日」

司馬はしばらく黙り込み、

「……所詮は占いだ。外れることもある」

雅春は顔をしかめた。「凶、か……」

「今晚、十九時から二十一時あいだは、携帯を傍に置いておいた
ほうがいいかもしれん。……念のためだ」

「……」

雅春の眼前で、司馬は長い間、ハンカチの上の硬貨を見つめていた。

逢坂聖人は無駄な抵抗をしない主義である。自分の周りを見渡せば（たとえば「元気のないおやじ」。それからおやじの出世を喜ぶ母親。加えて、引越しを夢見る妹たち）、聖ヨハネ騎士団学園への入学は避けられない運命と見るよりほかない。ならば、いつそ適応して、そこから新しく視界がひらけはしないか、やってみるのも悪くないかもしれない。

彼は基本的にポジティブである。

聖人は数日かけてゆっくりと、クリエイター・モードに入つて、マインドをソルジャー・モードに切り替えようと努めた。まず葉隠を読み、それから五輪の書を読み、俺はサムライなんだ、飢えた狼なんだ、キレたナイフなんだと自己暗示をかけた。彼は精神論から入るタイプである。

そうして、友人から、

「最近おまえ目付き悪くなつたんじゃねーの？ 不機嫌なブタつて感じだなオイ（笑）」

などと（酷いことを）言われるまで、闘争心に砥石を当てていつたのである。その一方で、混沌たる世界情勢の水面下で跳梁跋扈するガーディアンなる戦士たちの実態や、聖ヨハネ騎士団学園なる時代錯誤もいいところの名を冠したミッショング系まがいの学校のことを、詳しい友人を捕まえて根掘り葉掘り尋ねたり、ネットで調べたりした。

その結果、彼のマインドは早くも挫けた。

まず学園の一年生のうち半数が、米軍のブート・キャンプ並みの訓練に根をあげて自ら退学の道を選ぶという事実に当たつた。かれらはそもそも、ガーディアンにあこがれ、また先天的にディフェンダーを操りうると認められて入学していくのである。夢を持ち、そして夢を実現させる素質を持っている。青少年にとって、これ以

上の喜びがあるだろうか。にもかかわらず、彼らは辞めていく。

その？新兵訓練？とやうつて、

（どんだけ厳しいんだって話じゃないか……）

聖人は暗澹とせざるを得ない。

悪いことに、肥満体型の聖人は、運動をまったくもつて苦手としているのである。

それに加えて、一年生の下半期から一年生にかけての死傷率が、恐ろしく高い。一年生の後半になると本格的な実戦訓練が始まるらしいのだが、実戦だけにへたをすれば大怪我を負う。ひどい場合には死ぬ。そうして三年生になると、死傷率はぐぐっと下がる。三年まで生き延びたということは、一流のガーディアン候補生として認められたに等しい。卒業生は四大企業や各地の軍閥などから引く手あまたである。プロ野球選手の卵もビックリするくらいの契約金を提示されることさえあるらしい。その代表例がかの野宮美穂である。彼女は在学中に四大企業のひとつサヴォイア・インベストメントと契約し、一等地に豪邸が建つくらいの契約金を手にしたという。羨ましい話である。

が、そんな一握りの成功例の一方で、命を落としたり、一生の障害を背負つて学園を離脱する生徒が大量にいるのである。いくら聖人がポジティブといつても、限度がある。

それでも、頑張り次第では成功できるんじゃないいか。野宮美穂のような、可愛くてカッコいい女の子たちとイチャイチャしながら楽しい未来を送ることもあるかもしない。毎晩ベッドにあがると、彼は妄想にふけつておのれを奮い立たせた。

（負けちゃだめだ、逃げちゃだめだ、俺！）

そんなある日のこと。朝の食卓で、おやじがなぜか氣まずそうに脇に置いた朝刊を手にとつて、聖人は、もうダメだといつくりこmajindを挫けさせた。

見出しひにはこうあつた。

「テレビ出演などで著名なガーディアンの野宮美穂さん、自爆テロ

に巻き込まれて即死か」

孤児院出身の野宮さんは現地の福祉状況に強い関心を持ち、
休暇にたびたび孤児院を訪れていた。ひとりの少女と抱擁を交わし
たとき、少女の身体に巻きつけられていたプラスティック爆弾が爆
発し、

聖人は、手が震えるのをどうすることもできなかつた。

それだけに、聖ヨハネ騎士団学園から届いた書類のなかに、
(新入生は入学式前日までに入寮を済ませること)

の一節を見たときには、戦々恐々とせざるを得なかつた。

入学式は四月十一日で、部屋のカレンダーを見れば今日はすでに九日である。

午前中一杯かけて、ダンボールに生活用品や着替えを詰め、近所のコンビニにもつていて発送の手続きを済ませ、それから母親に軽自動車で駅まで送つてもらい、電車に乗り込んだ。

四月の麗らかな陽光が車内を明るくしている。窓のむこうには、河川敷の桜並木が薄桃色のはなびらを土手に敷き、そのうえで花見をしている人たちの姿がよく見渡せた。

昼間からビールを飲み、どんどん騒ぎをする人々を見ていると、溜息を禁じえなかつた。

「けつ、あいつらしい気なもんだぜ」

ソルジャーのマインドをいつしょうけんめい確立しようとしている聖人は、そんなことをニヒルに言い捨て、ずるずるとシートにだらしなく座つて脚を組んだ。そうして、オレはワルだと言わんばかりに、売店で買った禁煙パイポをすーはー言いながら吹かしてみる。

一端の傭兵になつたつもりで空あくびをし、(ほほ無人の車内で)かつたりーぜ的な空気を醸し出しているうつむ、ふと斜め向かいにシヨートヘアの可愛い女の子が座つていてことに気がついた。

気づくなり、急に自分の振る舞いが恥ずかしくなつて、パイポにふたをしてチェックのシャツのポケットにしまい、膝を揃えて座りなおした。

そのとき女の子が、ふと聖人を見て、小ばかにしたような笑みを浮かべた ような気がした。

三時過ぎになつてようやく電車が学園のある風宮市のホームに入

ると、聖人はバッグを肩にかけて電車を下りた。そして、はす向かいに座っていた女の子の勝気そうな横顔が、人ごみのなかに混じっているのを、なんとなく目に留めた。

駅のロータリーに出て、どのバスに乗ればいいのか、さつそく迷つて、泣きそうになりながらバス停の案内を読んでまわっているうち、立体歩道を挟んだむこうに、さつきの女の子のすがたを見つけた。やがて聖人は、女の子の傍のバス亭に、目的地の名前を見出した。

ホツとして、女の子の後ろにならぶ。と、突然、女の子が振り返つて、

「けつ！ あいつらしい氣なもんだぜ！」

と言つて、からかうよつた笑みを浮かべた。

「きつ、聞いてたの！？」

「君、まさかと思つけど、聖ヨハネ騎士団学園に入学するひと、とかじやないよね？」

「その、まさかです……」

女の子は、不思議そうに首をかしげる。

「君……入試会場にいなかつたと思つんだけど」

聖人はこくつと頷いて、

「なんかね、特別枠みたい。ほんとうはあんな軍隊みたいな学校行きたくなかったんだけどさ、おやじの仕事の都合で、行かなくちゃならなくなつてさ……」

いきなり女の子はのけぞつて、まるで恐ろしいものでも見るようになに聖人を見つめる。

「あのー……」

「君、もしかして特待生？」

「えつと……」聖人は学園から届いた封筒のなかに、そんな言葉があつたような気がした。けれど、まさか自分がそうだと思わなかつたので、黙つていた。

「調査部のひとにスカウトされて入学が決まったの？」

確かにやじがそんなことを言つていたし、思えば三日くらいまえ、
スーツ姿のひとが家に来て、両親に挨拶をしていたような気がする。
そのひとが置いていった名刺には、たしか、「財団法人聖ヨハネ騎
士団学園、調査部課長」と書いてあつた。

だとすると……

「うん……そう、かも」

「やつぱり特待生じゃん！」と、女の子は興奮したように言つた。「
すつづー！ 人つて見かけによらないんだね！ 君、どう見たつて
ダメキャラなのに……」

「……」

聖人は頭を搔いた。たしかに、駅ビルの硝子にうつすらと映る自
分のすがたは、めがねをかけてソフトマップの紙袋でも持つたら、ま
るで某巨大掲示板に（煽りの意味で）よく貼り付けられるアスキー
アートそのものだ。

「あつ、あたし金原さやか。今年から学園の傭兵？種養成過程の一
年生。よろしく！」

「あ……俺、逢坂聖人です。こちらこそ……」

ぎこちない笑顔を浮かべて、応じてみると、細身できらきらとし
ているさやかと、一枚のウインドウと一緒に映つてみると、そのあ
まりの違いに、摂理の残酷さを思わずにはいられなかつた。

ノーフューチャー？ 02（後書き）

とりあえず一萬文字書いてみてお気に入り登録がゼロなら続きを読む
「ワシの裏にしどきます。」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6301y/>

ETERNITY

2011年11月26日20時46分発行